

彙 報

第 58 回日本言語学会大会

東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所において、昭和 43 年 5 月 25 日公開講演、会員総会、5 月 26 日研究発表を開催。

1. 公開講演

応用言語学の課題	半 田 一 郎
広い地域の言語地図と狭い地域の言語地図	W. A. グロータース

2. 会員総会

- 1) 決算報告を別表の如く承認した。
- 2) 言語学者国際常置委員会の要請に従い、100 ドルの寄金を行うことを決定した。
- 3) 国立大学の言語学科を実験講座とすることを要求する決議を行った。

3. 研究発表（要旨は次号掲載）

ペルシャ語テヘラン口語の音韻について	松 下 周 二
チャム語におけるクメール語的要素	坂 本 恭 章
ヴェトナム語の漢語についての一考察	川 本 邦 衛
音程動態測定による日本語アクセントの解明	杉 藤 美 代 子
平安時代の動詞アクセントについて	早 田 輝 洋
音声現象の相対性と生成音韻論	佐 藤 年 男
Quotative Structure と Indirectification	奥 津 敬 一 郎
ルーマニア語の風格表現について	田 中 春 美
L. Weisgerber における言語学の構想	田 中 英 彦

第 22 回九学連合大会

昭和 43 年 6 月 1 日・2 日東京大学にて開催。本学会からは徳川宗賢氏が発表。

昭和 43 年度第 1 回委員会

日時：昭和 43 年 4 月 13 日

場所：学士会館本郷分館

出席者：()内は委任状受託数

北村 甫, 高津春繁 (12), 河野六郎, 小林智賀平, 佐藤 孝,

柴田 武, 徳永康元, 村山七郎 (1)

白紙委任 2 名 委員総数 34 名

議決事項:

- 1) 第 58 回大会に関して, 研究発表者, 公開講演者を決定した。
- 2) 今年度より大会を年一回にしたいという提案があり, 多数が賛成したが, 5 月 25 日の次回委員会で決定することになった。
- 3) 新村博士追悼号 (言語研究 54 号) に関して審議し決定した。
- 4) 科学研究費配分問題に関する件
審査委員の分類そのものには問題はあるが, 学会から推薦する従来のやり方の方がよいという意向を確認した。
- 5) 言語研究のバックナンバーの定価は当分従来通り据え置くことに決定した。

昭和 43 年度第 2 回委員会

日時: 昭和 43 年 5 月 25 日

場所: アジア・アフリカ言語文化研究所

出席者: ()内は委任状受託数

浅井恵倫, 池上二良, 泉井久之助 (2), 高津春繁 (5), 河野六郎,

小林英夫, 佐藤 孝, 柴田 武, 鈴木孝夫, 関本 至, 徳永康元,

長谷川松治, 服部四郎 (1), 前田護郎, 村山七郎 (1)

白紙委任 2 名 委員総数 34 名

議決事項:

- 1) 第 58 回大会運営のための任務分担を行った。
- 2) 決算報告等の総会議題を決定した。(後刻総会にて承認された。)
- 3) 大会を年 1 回にするか否かについて討論したが, 当面現在の年 2 回を維持することになった。
- 4) CIPL からの国際言語学者会開催の要請については断ることにした。
- 5) 九学会連合に関して鈴木委員より報告を受けた。
- 6) 科研費配分問題について柴田委員より報告を受けた。

昭和 43 年度第 3 回委員会

日時：昭和 43 年 7 月 20 日

場所：学士会館本郷分館

出席者：（ ）内は委任状受託数

浅井恵倫，高津春繁 (13)，河野六郎，小林智賀平，佐藤 孝，
柴田 武 (1)，鈴木孝夫，服部四郎 (3)，
白紙委任 1 名 委員総数 34 名

議決事項：

- 1) 故新村博士追悼号の編集について審議し決定した。
 - 2) 秋季大会について次のように決定した。
 1. 開催地は大阪外国語大学。
 2. 運営委員長を岩倉具実氏にお願いする。
 3. 日程細目を決定した。
 - 3) 九学会連合の会費値上げ (10000 円に) を承認した。
 - 4) 文科系学会連合からの「日本の近代化について」の論文執筆者紹介依頼について、森岡健二氏を推薦することにした。
 - 5) International Permanent Committee of Linguists の E. Haugen からの手紙を審議した結果、年間 100 ドルの寄金を行うことに決定した。今年は 5 月 25 日の会員総会の決定に基づき 100 ドル寄金し、来年度以降については来年度の会員総会の承認を得次第実施する。
- ◇ 本会評議員、石浜純太郎氏は、昭和 43 年 2 月 11 日、脳軟化症のため、大阪府立病院にて永眠された。享年 79 才。

先生は、明治 21 年 8 月 27 日、石浜豊蔵氏の長男として大阪市堂島に生れ、汎愛小学校、東区第一高等小学校、府立市岡中学校を経て、明治 44 年 7 月東京帝国大学文科大学支那文学科を卒業された。ときの卒業論文は「歐陽脩研究」で、漢文でお書きになった。

先生と漢学との結び付きは古く、10 才の頃より、大阪の泊園書院に入門、藤沢南缶の薫陶を受けておられた。その漢学の素養とそれから発展したチベット学、西域学など東洋学全般に及んだ先生の学問は、とくに西夏の研究と、蒙古を中心とするアルタイ学の専門家としてよく知られた。

西夏語の研究は、いつ頃からお始めになったか詳かではないが、大正の終

りに、日本研究の目的で来日したネフスキーの興味を西夏に引きよせられて以来、協同研究の形で積極的に進められた。ネフスキーと仕事を分担して、自分は専ら、漢訳経典との対照と文字組織の解明を受けもったと云っておられた。毎週会って研究成果を話し会ったと「西夏語研究の話」には書かれている。

アルタイ語の研究は、それよりもずっと古くから手をつけておられた。現代蒙古語の習得の必要を痛感され、大正 11 年 4 月に大阪外国語学校蒙古語部に選科委託生として入学、若い学生たちと机を並べて蒙古語を学ばれた。2 年後に退学、トングース・トルコをはじめアルタイ学全般にわたって、関係するあらゆる文献を集めようと尽力された。とくにソビエトで出版されたものは、先生の手許にほとんど揃っていた。その貴重な文献をも、後進の求めに応じて、惜みなく心よく貸与された。先生の周辺には、東洋語学の研究を目指す、多くの若い学徒が集まった。

後年、関西大学、竜谷大学、京都大学、大阪外国語大学、天理大学、など大阪近郊の諸大学で教壇にたたれ、とくに竜谷大学・関西大学では、同学の東洋史学研究室の発展に多大の寄与をなしたが、先生自身はあくまで町人学者として、一生を終りたいともらしておられた。先生は大阪の民間学者を大いに敬愛された。富永仲基をはじめ、民間学者の業績を顕彰され、この功績に対して、昭和 29 年、大阪府は、なにわ賞を先生に献げた。

先生の代表的な論文は 4 冊の著書として伝っている。「残雪軒余録」と題する未発表のノートも数冊のこっているが、研究成果を大きい著書や論文として発表されなかった。頭の中に蓄えておられた。先生の講義は、豊富な題材の中で、決して高ぶらず、述べてつくらずという方進で一貫されていた。そのことが、後進の学徒に多くの希望を与え、学問への熱情を高ぶらせるのに効果があった。まさに優れた指導者であったと云える。

先生はまた、学会の創設者として、いつも同学の士のまとめ役をなされた。大正 12 年ネフスキーなどと大阪東洋学会をつくられたのをはじめとして、昭和 2 年には静安学社、昭和 17 年には、大阪言語学会、28 年には日本西蔵学会とつぎつぎに学会を組織された。ある人は先生を評して、学会製造者などと云った。先生はただ笑っておられた。

3, 4 年ほど前に脳出血で臥され、御自宅で休養なさっておられた。本年 2

月風邪がもとで入院されたが、11 日になり急に容態が変り、御家族と数人の門下生に見守られて永い旅路につかれた。

御蔵書数万冊は、目下大阪外国語大学図書館に移されている。

(なお先生の年譜は、石浜先生古稀記念『東洋学論叢』にくわしい。)

著書

富永仲基 (創元選書) 創元社 昭和 15 年 2 月

浪華儒林伝 全国書房 昭和 17 年 7 月

東洋学の話 創元社 昭和 18 年 4 月

支那学論攷 全国書房 昭和 18 年 7 月

昭和 42 年度決算

前期繰越	1275	刊行経費	900225
会費(現金)	357969	送送料	38564
(振替)	674490	大会講演会費	48275
雑誌売上	70500	通信費	27835
寄付金	0	事務用品費	8960
補助金	80000	九学会連合費	8000
利息	3420	文化系連合費	3000
計	1187654	雑費	152870
		計	1187169

残高 485 円

◇ 本誌は文部省昭和 43 年度科学研究費補助金の交付を得て刊行されたものです。